

## (二) ラッキー・カントリーと豊かさ

誰が言い出したのかは知らないが、サラリーマンが海外勤務を命じられる場合、勤務地として「理想の三S」があるという。サンフランシスコ、シンガポール、そしてシドニーがそうした三つの都市だそうだ。

それらの共通点は、美しい港湾都市、温和な気候、多様な文化が平和的に共生する都市といった点であろうから、それらが理想の由縁だということになる。日本銀行はこれらの都市に駐在員事務所を置いていないので、一般的にはそうした経験はできないが、筆者はたまたま現在シドニーでの勤務を命ぜられていることから、すでにこの半年間ひとつのSを経験しつつある。まさに理想郷での勤務ではないかと冷やかす知人もいる。ただ、シドニーでの現在の任務と仕事量がこれまで二十年余の本行動務経験の中でも

最も重いものだとすれば、そう簡単に理想郷に居るとばかり言っておられないが、少なくともこれまでの何度かの海外勤務の中でも色々変ったことの多い環境に居ることは確かである。

### 恵まれた自然環境

シドニーには季節的にまず冬がない。霜が降りたり雪が降ったりするような寒い日はなく、一年の四分の三以上の長い期間が日本の気候でいえば春ないし秋に相当する快適な季節である。そして空は、たいてい気持ちよく青い。日本では区別が明瞭な春の花と秋の花がここでは混然一体となって、しかも半年以上も満開の状態を続けるのには驚かされる。

朝夕の通勤時、バス停までの道すがらの家々の庭には、紅葉した木々の下にさざんかなど秋の花がみられる一方、椿、つつじ、木蓮、藤といった春の花やハイビスカスをはじめ南国的な花が何と同時に咲いているのがここでは通常の風景である。また芳香を放つ花のある家の前を通りすぎるのが毎朝の楽しみのひとつになる。

現在の住まいは典型的な郊外の住宅地にあるが、朝の目覚めは鳥の鳴き声によることも多い。鳥名は知らないが、その鳴き方が丁度メンデルスゾーンのバイオリン協奏曲のはじめの五つの音に実によく似ているのがある。これを聞くと、全くの偶然とはいえ、自然と芸術がつながっていることに不思議な気がしてならない。

自然の良港に立地したシドニー。それだけならばさして珍しくなろうが、その市街地の三方は一時間内外のドライブで行きつく大自然の森林山岳国立公園に囲まれるという恵まれ様だ（なお、東側は太平洋）。また市街地から車で二〇分も行けば白い長い砂の浜辺に至る所にあり、青空の下、白い波に乗ってサーフィンやウインド・サーフィンに興じる者の姿が点々とみえて印象的である。

海といえば、磯釣りや沖釣りも当地では人気がある。乗り合いの釣り船で少し沖へ出れば、獲物のサイズも格別大きなものとなる。筆者のような初心者でも四〇センチもある大きな魚（シマアジ、クロダイ等）を半日で一〇匹余もつりあげることができ、先日も隣り近所にも分けて夕食に供することができたほどだ。

一方、陸上の楽しみといえば、英国の伝統を引くためであろうか、郊外の農場では乗馬が米国などの場合に比べ格段に盛んである。農場での民宿（ファーム・ステイ）には、乗馬による森林散歩がセットされているものも少なくない。それにゴルフも見逃せない。現在の住まいから車で十五分内外のところはゴルフ場が三つ、四つある。先般、当地へ赴任後始めてゴルフに出かけたが、そのコースは週末の午後に予約なしで行ってもほとんど待たずにプレーできるパブリック・コースであり、その料金も僅か約千円という日本では考えられないものであった。

### 文化、生活水準でも恵まれた環境

だがシドニーは、自然の恵みだけがとりえでもない。音楽会などについていえば、ロンドンやニューヨークでのプログラムの贅沢さには比べられないかもしれないにしても、世界中のその他の主要都市に比べても遜色はあるまい。数多くの地元オーケストラの演奏会がみられるし、先般もボリショイ・バレエがやってきた。

また高級商店街では、ルイ・ヴィトンやグッチなどの高級身の回り品を何でも買うことが出来るのはもちろんである。シドニーの特徴は、こうした市街中心部からほんの二

〇〇三〇分の範囲に前記のような自然が同居している点にこそあるといえるだろう。  
シドニーは、まさにラッキー・カントリー（幸運な国）オーストラリアを絵に描いたような都市ではあるまいか。東京に住み慣れた筆者のような者からみれば、率直に言ってこれこそがほんとうの豊かさではないかという感じが強く、とくに赴任当初に受けた感動は忘れえないものである。

### 豊かさには多面性

ここには、日本人の多くからみれば貴重な価値を持つ要因が集積しており、これが我々からみた場合の豊かさを形づくっている。しかし、実際にかんりの期間ここで生活してみると、豊かさの意義はもう少し多面的なものであることにも気づいてくる。東京の生活では当然のこととして格別意識していないことも、豊かさを形成する重要な要因であることが体験的にわかってくるからだ。

いずれも比較文化論的な観点からよく論じられることだが、そのひとつは、日本では日常的な各種サービスの提供が時間的に大変正確になされることだ。新幹線や地下鉄などの公共交通機関が分単位で概ね正確に運転されていることがその代表例である。これはまた、当地新聞の海外旅行担当記者の旅行体験談としても、常套的な引用例となっている。東京での朝の通勤の地下鉄が一〇分程度遅延した場合に車内で詫びのアナウンスがなされたり、新幹線で一定時間以上の遅れが出た場合に特急料金の払い戻しの制度があるといったことは、豪州での感覚からすればはなはだ驚異的なことといえる。

### オーストラリア的な時間感覚と対処策

当地では、日本的な正確な時間の感覚は総じて期待すべからざるものに属する。そもそも今回、豪州へ入国する時からその入国ビザ取得に際してさえ、いろいろな手をつくしても結局半年近くもかかった国である。現在の勤務先（マックオリーリー大学）に着任した時、近々新しいオフィスを与えるので今しばらくは仮のオフィスで我慢してほしいといわれて与えられた部屋が半年経った現在でもなおそのまま毎日の仕事場となっている状況である。また、その部屋のドアに所定の表示板（氏名および日本経済研究所長と記したプレート）が取付けられるにすら、五か月も要したことを考えると、部屋の引越

しはまだ先のことと覚悟しておかねばなるまい。

こうした時間感覚は何も公共部門だけではなく、競争原理が十分に作用してよさそう  
な民間部門においても大同小異である。

赴任当初まず取り組まねばならなかった自動車の購入に際しては、購入契約した自動  
車の入荷引渡しの日を当然ながら額面どおりに受け取り予定をたてていたが、当日にな  
ってもなお何の連絡もない。その後何度もクレームをつけて交渉した結果、実際に車を  
手にしたのは結局一〇日も後になってからであった。

また、当地への引越しのための荷物配達や当地での家庭諸設備の修理については、予  
約した時間になっても業者が全く現われないので何度いらいらしたのか（そもそも約  
束の日のうちに来ず、改めて交渉する必要があることが多い）。市場競争原理に立脚し  
た豪州の経済がなぜ平然とこうした面を持っているのかは、筆者にとってなお大きな謎  
であり、今後の研究課題である。

いずれにせよ、当地に長く住んでいる日本人仲間から後日教わったのは、そうしたサ  
ービスについては、約束の時間はもちろん約束の日にそれが期待できると思わない方が  
現実的であり、またその方が精神衛生上も良い対応だということだった。なるほど、も  
っともなことではある。

### 日豪対比による東京の再評価

東京での今ひとつの豊かさとして再認識されるべきは、広い意味での日常生活の便利  
さだろう。ちょっと急な買い物が遅く必要になっても近くのセブン・イレブンへ下駄  
履きで行って用事をすませることができるのは、東京に居れば当たり前のこととしか思わ  
れないが、当地からみればそれは一種の贅沢であり豊かさの一面を持つように思える。

また、日本では日常生活における各種の全国規格設定がなされていることについても  
やはりそうした要素が含まれているように思う。例えば、当地では家庭用電球ソケット  
にいくつかのサイズがあるばかりではなく、それぞれにねじ込み式と差し込み式の  
両方があるので、電球が切れた場合、フィットする新電球を買い求めることのわずらわ  
しさにはうんざりする。

さらに、豪州では標準時として冬場には三つの時間帯があるが、その区分が必ずしも

一時間単位ではなく三〇分差の時差を採用する州があり、さらに夏時間として一時間時計を早める州と早めない州とが併存するばかりか、その移行日も統一されていない。当地が夏時間入りした日のシドニーの新聞には「またまた混乱の季節がやってきた」という自嘲的な解説記事が掲載される有様である。こうした夏時間への移行に際し、果たして州際交通機関の運行スケジュールや金融機関での資金決済時刻はどういう取扱いがなされているのか興味深いところではある。

いずれにせよ、こうした状況に比べれば、日本での生活には我々が日常的にはさして意識しない豊さを秘めている面があるといえるのではないか。また大都市ながら東京での生活が比較的 안전한こと（犯罪率の低さ、あるいは犯人検挙率の高さ）もそれに属することがらであろう。

### ほんとうの豊かさを求めて

シドニーからみれば、東京はいくつかの質を異にする豊かさを持つ。一方、東京からみれば、シドニーでの生活にはあこがれの要素が少なくない。とはいっても、一人当り

GNP（一九八九年）で比較すると、日本の二三千米ドルに対し、豪州は一八千米ドルとかなり日本がリードしていることも考えに入れなくては東京に対して不公平だろう。

とはいうものの、GNPは経済活動の結果を示すひとつの尺度ではあっても、むしろ豊かさそれ自体の尺度ではない。豊かさを考える場合には、結局、人間は自らが保持ないし享受しているものよりも、未だ持っていないものに対してとりわけ高い価値を見出す傾向がある（隣の芝生は緑が濃い）といえるのではないか。

こうした幸いな偏向、あるいは桃源郷の理想は多分いつの時代になってもなくなるものではなく、それこそが我々個人にとって日々の勤労意欲の源となり、また前進のよすがとなっているのではないだろうか。

（日本銀行行友会文芸部「行友」五五号、一九九三年）